

# サタンの憎む大真理

—贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き—



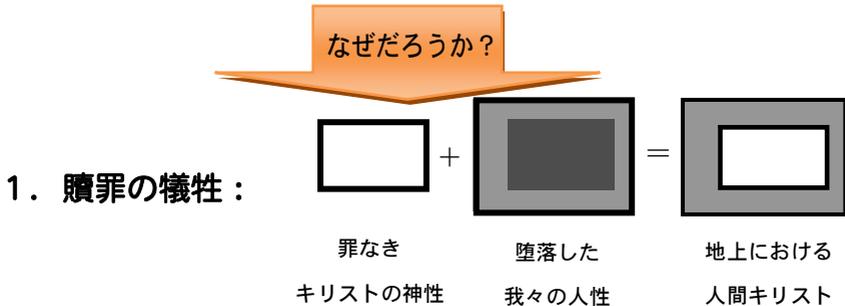
現代の真理シリーズ No. 5

# サタンの憎む大真理

—贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き—

金城 重博

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、①贖罪の犠牲と②全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである」(大下 221)。



## 1. 贖罪の犠牲：

キリストはご自分の神性に我々の墮落した人性を結合なさった。そのご生涯において神の律法を完全に守られ、罪のない生涯という品性を築かれた。十字架において「事終われり」「それは成った」と叫ばれた時、我々の墮落した人性がどんなものになり得るか、罪なき完全な生涯は我々人間に可能であることを証明されたのであった。なぜ、サタンは贖罪の犠牲をそれほどまで憎むのか？

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとりりに死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」(キ道 10, 11)。「神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することができるよりもっと高い。…クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において完全であられたように、キリストに従う者も、その生活において完全でなければならない。…イエスは『罪の肉の様』になられたが、罪のない生涯をおくられた(ローマ 8: 3)」(希中 20, 21)。

## 2. 全能の仲保者の働き：

キリストの仲保の働きは、聖所の奉仕と至聖所の働きがある。至聖所における最後の仲保によって、我々の品性はキリストのような罪なき品性に仕上げられる。

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちにならなければならない状態なのである」(大下 397)。

だから、サタンはそれほどまでに「贖罪の犠牲と全能の仲保者の働きを」憎むのである。エゼキエル 36:23。イザヤ 43:25。



## 第一部

**イエスを見失ったか、再臨信徒よ！**

**見ざる、聞かざる、言わざる**

# 大 真 理

「キリスト教会は、みな十字架を説く。信仰による義も説く。安息日を守る教会もある。キリスト教のエッセンスは愛である。他の教会の方が愛と喜びに満ちあふれている。明るい。暖かい。キリスト教会はみな仲間なのだ。ローマ・カトリックはもう変わったのだ。セブンスデー・アドベンチストも変わってきたのだ。しいてセブンスデー・アドベンチストでなくても救われるのではないか？」という声が聞かれる。



ある牧師が調査審判について説教したそうだ。すると終わってから、たまたまその教会に来ておられた指導者に「そういう説教はしない方がいいよ、福音を説くように」と注意されたそうだ。ある教会で、教課研究の時（ちょうど聖所の研究であった）、若い牧師が「私はそのことは良く知りませんので、みんなで賛美歌を歌いましょう」と言って教課研究はそっちのけにしたそうだ。また、家庭訪問をした牧師が机の上に広げ

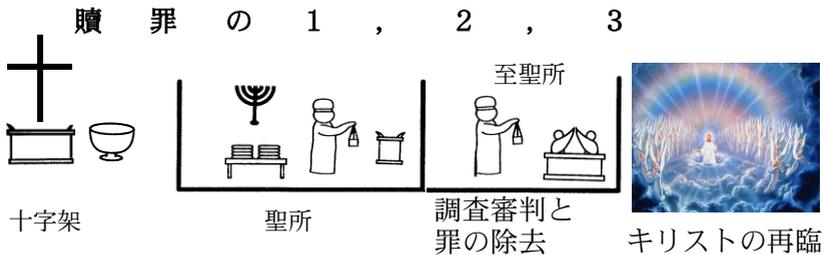
であった「各時代の争闘」の本を見て「こんな本を読んでいるんですか。150年も前に書かれた本ばかり読んでいるとあなたの頭も古くなりますよ」と言われたそうだ。その信徒は「では聖書ばかり読んでいると、もっと頭が古くなりますね」と言いたかったけれども口に出せなかったとか。

再臨の切迫、日曜休業令、罪の除去、罪なき完全な品性、聖所の清め、ローマ・カトリックの世界支配陰謀、その危険な戦略、バビロンとなった他教会、調査審判、律法遵守、イエスの証＝預言の霊について今はあまり聞かないと古い信者は嘆く。そんな話は聞いたことがないと新しい信者からの声。SDA 嘆きの壁が築かれたのだろうか。

かつて主を迎えることに熱心だった再臨信徒にも、我が教会の柱石について『見ざる、聞かざる、言わざる』シンドロム（症候群）が現れたのだろうか。アドベンチスト焦燥の本当の原因を追求してみたい。

# 1 ・ 人類のための贖罪の働き

キリストによって人類に与えられた贖罪の犠牲は完全であった。しかし、キリストはご自分の生涯と死によって成し遂げられた贖いを、信じる者の内に適用し、完成するために天の聖所で仲保に入られた。天の至聖所で調査審判と罪の除去の働きが終わると彼らは主を迎える準備ができるのである。（大争闘下 222 参照）。



## 2

## ・セブンスデー・アドベンチストの誕生

セブンスデー・アドベンチストは、1844年に主イエスを至聖所に見出して誕生した。1844年10月22日にキリストの再臨を期待したが、実現しなかったので「大失望」を経験した。黙示録10章に預言されていた通りである。しかし、その大失望の後、彼らは断食と祈りと預言の研究によって主イエスを天の至聖所に見出した。どんなにか喜びと確信と希望に満たされたことであろう。

「今彼らは、至聖所の中に、再び主を見た。それは、彼らのあわれみに満ちた大祭司であり、まもなく彼らの王として、救出者として来られる方であった。聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。彼らは、神が、誤ることのない摂理によって自分たちを導いてこられたことを知った。彼らは、最初の弟子たちと同様に、自分たちが伝えた使命を理解できなかったのであったが、しかしその使命は、あらゆる点において、正しかったのであった。それを宣言することにおいて、彼らは神のみ心を成し遂げたのであって、彼らの労苦は主にあってむだではなかった。彼らは、新たに生まれて、『生ける望みをいだかせ』られ、『言葉につくせない、輝きにみちた喜びに』あふれたのである」(大下 138,139)。

「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所にはいる時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである。わたしは、彼らが、過去を振りかえって、イエスの再臨の宣言から1844年における時の経過に至るまでの、彼らの経験を回顧しているのを見た。彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた。第三の天使は、過去と現在と未来を照らした。そして、彼らは、神が不思議な摂理によって、彼らを導いてこられたことを知るのであった」(初文 415)。

そして、彼らは「もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」（黙示録 10：11）と言う声に従って全世界へと宣教に立ち上がったのであった。

### 3

## ・ 見ざる、聞かざる、言わざる 「至聖所の最後の贖い」

しかし、教会は再びイエスを見失ってしまう。大失望の後、至聖所に最後のあがないをなされる大祭司としてのイエス、ご自分の花嫁である教会と結婚をするための花婿イエスを見出してあれほど喜んだ教会は、なぜイエスを見失ったのか。彼らは、至聖所の契約の箱の中に十戒が収められているのを見た。十戒の特に安息日に注目した。日曜日を主の日としてきた伝統のおろかさから脱し、「破れを繕う者」という役割を認識し、聖書の安息日を高く掲げた。裁きの時に住んでいるという自覚のもとに律法を完全に守らなければ調査審判に合格しない、主を迎えることはできないと考え、律法を説くこと、セブンスデー・アドベンチストの教理を擁護することに汲々とした。

ちょうど、イスラエルの民が、シナイ山のふもとで恐れあまり、十戒を守り行きますと三回も誓ったことと同じであった。神は、イスラエルが自分たちの力で律法を守ることができないことはよくご存知であった。それで信仰による義を教えるために聖所を作らせたのであった。「**贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き**」という福音が聖所の儀式にぎっしり詰まっていた。しかし、イスラエルは、なかなか神のレッスンを学べず、律法主義に陥ってしまった。

1852年には早くもラオデキヤ状態になったと預言者は指摘している。1863年にはセブンスデー・アドベンチスト教会という組織ができる。しかし、律法主義はますます固まってしまう。教会は、律法、律法を強調し、「ギルボアの丘に露も雨も降らず」からからになってしまった。

1888年、神は教会を癒すために、ミネアポリス世界総会で、人間の唇から聞いたことのない「尊い真理」を、ジョーンズとワゴナーを通して与えられた。それは、後の雨一大いなる叫びをもたらし、義をもって速や

かにみ業を終わらせるはずのメッセージであった。1888年のメッセージのエッセンスは、人は「Nothingness」、つまり「無」であり、イエスが「Everything」、つまり「すべて」である、「人にはできないが、神にはできないことはない」ということであった。ただ信仰によってのみ義とされる。ただし、義とする信仰は「無から有を呼び出される神を信じる」信仰であり、「望み得ないのに望みつつ信じる」信仰である。義、完全に至らせる信仰は「イエスの信仰」であると強調したのであった。彼らの説いた信仰はアブラハムの、そしてイエスのダイナミックな、生きた信仰であった。

わが教会は、その尊いメッセージを拒んだ。わが教会は、イスラエルがカデシ・バルネアでヨシュアとカレブのメッセージを拒んで40年間荒野をさ迷うことになった同じ轍を踏むことになった。チャンスを逸したのであった。1888年の後に預言者は、「かつてない深い背教に陥った」と嘆いた。

預言者は、1895年に「多くの者は、イエスを見失った」と指摘している (TM 91,92 1895)。

その結果、「セブンスデー・アドベンチストのアイデンティティー(独自性)喪失の危機」「アドベンチストの焦燥」などと嘆きの叫びが聞かれるようになった。古代イスラエルは周囲の国々を見て、その習慣を取り入れて妥協した。現代イスラエルも世俗を見て、「ほとんど同じ見方で物事を見るように」なってきた (大下 378 参照)。

我々の先駆者たちが得意としたこの主題について、その考え方、提示の仕方が以前は成熟していなかったとは言え、よく語られた時代があった。しかし、今日の教会はどうであろうか？

## 4

## ・ 結婚式場(至聖所)に花婿を見失ったSDAの焦燥

セブンスデー・アドベンチストが見失ってはならない二つのことがある。①一つは、天におられる大祭司イエスであり、②もう一つは、この地上の大祭司、「サタンの代表者、一大傑作(大争闘上 44)」「獣」、「バビロンの母」、「大淫婦」と「その娘たち」「偽預言者」とそして「龍=心霊術」の働きである。わが教会は、最後のサタンの大欺瞞について世の人々に警告しなければならない。

しかし、我々はこれらに関して「見ざる、聞かざる、言わざる」になっていないだろうか？

天の至聖所から、第一天使、第二天使、第三天使の使命が生まれた。この三重の使命は人々に主に会う備えをさせる使命である。しかし、それは、一般キリスト教道徳のお話に変わりつつあるのではないだろうか。厳粛なさばきのこと、諸教会はバビロンとなったこと、獣—法王教の世界支配陰謀、日曜休業令のことを説くな、恐怖を与える、警告はいらないと聞かされていないだろうか。我々はどこを見ているだろうか。

ヨセフとマリヤはエルサレムの過ぎ越しの祭の帰りに、旅と社交の楽しみに夢中になっていた間にイエスを見失って困惑した。いわゆる「アドベンチストの焦燥」に陥ったのだ。しかし、彼らは神殿にイエスを見出して喜んだ。

我々が目を向けなければならないのは、天の神殿だ。そうするとき、自分の立場、アイデンティティーがはっきりする。



1844年の大失望、再臨信徒についてこう記されている：

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった」(大下 140)。

下記の1、花婿なるイエスに目を向けるときに、2のセブンスデー・アドベンチストこそ花嫁なる最後の真の教会であるという自覚が生まれる。そして3、4の敵を見極め、その戦略に目覚めるのである。イエスから目を離して、敵にばかり目を向けると危険である。恐れと、迷いと、妥協が生まれてくるであろう。

1. 見ざる、聞かざる、言わざる「花婿なる主イエス・キリスト」
2. 見ざる、聞かざる、言わざる 「花嫁なる『女の残りの子ら』と預言されている最後の真の教会」
3. 見ざる、聞かざる、言わざる 「龍、すなわちサタン」
4. 見ざる、聞かざる、言わざる 「サタンの花嫁とも言うべき赤い獣に乗った大淫婦、迫害教会—偽予言者—、心霊術」



天の至聖所の仲保者



地上のサタンの代表者

「ヨハネは王の美しさをながめて、自分を忘れた。彼は尊厳な聖潔を見て、自分が無能力で無価値なことを感じた。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。彼は王の王であられる神の前に低く腰をかがめていたので、地上の君主たちの面前に恐れることなくまっすぐに立つことができた」(希上 104)。

雅歌書も、黙示録も、聖書全体もキリストと教会のつながりを結婚関係で描写している。キリストとこの地上のご自分の教会は、それほど密接な関係なのである。また、キリストの最愛の花嫁を奪おうとするサタンとの熾烈な戦いの記録も聖書に明記されている。

「結婚制度を回復する福音の目的一人類の保管にゆだねられたその他のあらゆる良い神の賜物と同じに、結婚も罪によってゆがめられたが、その純潔と美しさを回復するのが福音の目的である。旧約聖書においても新約聖書においても、結婚の関係は、キリストとその民、すなわちカルバリーの価を払って買いとり、贖われた者たちとの間のやさしく聖なる結合を表わすために用いられている。『主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである』(エレ 3 : 14)。雅歌では、花嫁がこう言うのが聞かれる『わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの』そして彼女にとって『万人にぬきんで』た彼はご自分の選んだ者にこう言われる、『わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しのきずもない』(雅歌 2 : 16、5 : 10、4 : 7)。…

そこでパウロはこう言っているのである、『教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように妻を愛しなさい。キリストがそうなされたのは、水で洗うことにより、ことばによって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。それと同じく、夫も自分の妻を…愛さねばならない』(エペソ 5:24-28) (祝福 79, 80) (スタディーバイブル旧約 904)。

花嫁が、真の夫である天の大祭司から目を離して、地上の大祭司 - 法

王、司祭—に魅せられると彼女はアイデンティティー(独自性、帰属意識、存在感)を見失ってしまうことになる。セブンスデー・アドベンチストは、何百というキリスト教会の中からわざわざ残りの民として存在するようになった、特別な終末論的存在理由があるのである。「女の残りの子ら、すなわち神の戒めとイエスのあかしを守る」最後の真の教会という立場を失ってしまうと、大淫婦、バビロンとその娘、すなわち一般キリスト教会からは特別に区別された真のキリストの教会という意識は失われていく。

セブンスデー・アドベンチストは、雅歌書には、「わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ」(雅歌 6:9)と描写されている。「これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない」(民数記 23:9)。キリストの花嫁と自称するキリスト教会はたくさんある。しかし、セブンスデー・アドベンチストは、ただひとり、キリストの花嫁として選ばれた預言の教会である。解釈の意見の相違で生じたキリスト教の一教派ではない。

決して誤解していただきたくない点がある。明確に理解しておかなくてはならない点がある。それは、セブンスデー・アドベンチストが最後の真の教会だからといって、他教派の信者は救われれないと言っているのではない。そのようなことは断じてない！ 預言者は、今日多くの神の民がバビロンといわれる諸教会にいると言っている：

「バビロンを構成する諸教会は、靈的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者が数多くいる。この時代のための特別な使命をまだ悟っていない人々が多くいる」(大下 92 [321 頁も参照])。

反対にセブンスデー・アドベンチスト教会にいるからといって皆が救われるのではない。救いは個人的なものである。

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言しながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰(立場、英文)を棄てて反対の側に加わる」(大下 378)。

従って、組織された教会としては、セブンスデー・アドベンチストはキリストの最愛の、真の教会であるという自覚を持つと同時に、他教派、すなわち、カトリックは大淫婦、母なるバビロンで、その娘たちが一般キリスト教会であるとの認識をしっかりとっておくべきである。また、そのバビロンに、光を求め、救われるべき神の民が多くいること、また、反対に最後の真の教会、セブンスデー・アドベンチストの中にいながら、信仰を捨てる者が多くいるという厳粛な靈感の警告をも認識しておくべきであろう。古代イスラエルについて次のように書かれている：

「イスラエルの人々が、最初にカナンに定住したとき、彼らは、神政治の原則を認めた。そして、国家は、ヨシュアの指導のもとに繁栄した。しかし、人口の増加と他国との交渉がそれに変化をもたらした。人々は、隣接する異邦の風習を数多くとり入れ、彼ら自身の特異性と清い性質とを大部分犠牲にした。彼らは、徐々に、敬神の念を失い、神の選民であることを誇りとしなくなった。彼らは、異邦の諸王の外見の美麗さに心をひかれ、自分たちの簡素なことにあき果てた」（あ下 265,266）。

どうも、今日のわが教会は「認知症」にかかって、物忘れがひどくなり、自分の名前さえ思い出すのが面倒くさいという人が多くなっているのではないかと危惧される。端的に、なぜ自分はセブンスデー・アドベンチストでなければならないのかという理由を持っていないため、こんな長たらしい名前はやめて、もっと一般受けのする簡単な名前に変えようと言いつけているのである。

これもみな、我々のさきがけとなって至聖所に入っていかれたイエスを見失った結果であると思われる：

「聖所問題が、1844 年の失望の秘密を解くかぎであった。それは、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きとをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした」（大下 138）。

前文によると、神の民の立場と働きをはっきりさせるのは、何だろうか？ 聖所問題だ！

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねば

ならない。すべての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代において必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる」（大下222）。

「神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる」という意味は、セブンスデー・アドベンチストという立場を失うということである。なぜ、今日、再臨信仰の土台である聖所の清めと調査審判に触れないのであろうか？

セブンスデー・アドベンチストという立場を与えるのは何であろうか？ 第七日安息日だろうか？ 安息日を守る教派はたくさんある。たとえば、ユダヤ教会、セブンスデー・バプテスト、チャーチ・オブ・ゴッド、御霊教会、等々...しかもその中にいくつも分裂した教会があり、安息日を守る教派は30くらいあると聞いたことがある。

セブンスデー・アドベンチストは、聖書の真理と証明されたものは、他教派から全部取り入れてできた教会であるが、他教派と関係なく神から与えられた唯一独特の真理は、聖所と調査審判の教理である。それくらいセブンスデー・アドベンチストであるなら誰でも知っていると言われるかもしれない。以前はそうであったが、しかし、世代が変わって今日は、それさえも言おうとしない、聞こうとしない、見ようとしていない、セブンスデー・アドベンチストが多いのはまことに残念である。

しかし、今回は更につつこんでみたい。よく私は十字架を掲げず、聖所のみを強調すると批判される。その論議は、律法と福音の関係と同じであろう。律法と福音が切り離せないように、十字架と聖所は切り離せない。十字架のキリストの死は、聖所の奉仕の一部である。キリストは小羊であり、小羊の血をもって聖所で奉仕する祭司であられる。キリストは①犠牲であり、②我々の祭司である。今日、十字架は説かれるが、我々の大祭司の働きはめったに説かれない。衣服が汚れるとランドリーに持っていく。罪によって汚れた我々を清めるのは、天のランドリーで働いておられるイエスさまであり、漂白剤は十字架で流された血である。

聖所のみを強調し、十字架を片隅に追いやって主を愛さないなら、「のろわれよ」（コリント第一 16：22）である。

「天の住民にとっては、十字架こそ注目の大中心である。彼らは十字架を通して墮落した人間があがないを受け、神と一つにされることを知っている」（This Day With God 51）。

「天の聖所は人類のためのキリストのお働きの中心そのものである....天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである」。「そこにはカルバリーの十字架からの光が反映している」（大下 222）。

十字架は永遠にわたって、「我々の科学であり、歌である」。今日、十字架の光は天の聖所から反映しているので、至聖所の「ほふられたと見える小羊」を仰ぎ見ることが特に重要である。黙示録 5 章は調査審判の光景である。調査審判は至聖所においてなされる。だから、預言者は聖所問題が「どんなにか重要であろう」「何よりも重要である」と言っているのである。

「そこにおいて、われわれは、贖罪の奥義について、もっとはっきりした理解を持つことができる」（大下 223）。

贖罪の奥義のもっとはっきりした理解はどこにおいてなされるというのか。「そこにおいて」、つまり至聖所においてである。我々の十字架の理解は、一般キリスト諸教会のそれよりももっと深いはずである。セブンスデー・アドベンチストには、至聖所における最後のあがないの働きにおいて「互いに関連し調和する真理の全体系」（大下 138）が明らかにされたのである。旧約の聖所の儀式に福音がぎっしりつまっている。あがないは、流された血（十字架の犠牲）だけによるのではなかった。注がれた血（全能者の仲保）によってあがないがなされたのである。

「日ごとの務めのうちで最も重要な部分は、個人個人のために行なわれた務めであった。悔い改めた罪人は供え物を幕屋の戸口にたずさえ、このいけにえに手を置いて罪を告白し、こうして象徴的にその罪を彼自身から無垢の犠牲の上に移し変えた。それから動物は、彼の手で殺された。祭司は、血を聖所に運んで、この罪人の犯した律

法を入れた箱の前方にたれているとばりの前に注いだ。この儀式によって、罪は血によって象徴的に聖所に移された。血が聖所の中にあらずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、「これは……あなたがたが会衆の罪を負(う)……ため、あなたがたに賜った物である」(レビ 10:17)と言ったように、祭司がその肉を食べなければならなかった。これらの儀式は、共に、悔い改めた者から聖所へと罪が移されることを象徴したものであった」(あ上 418,419)。

聖所の奉仕は、日毎の奉仕と年毎の奉仕の二つに分かれていた。日毎の奉仕で祭司が犠牲の血を至聖所の前の幕に注いであがないがなされたことがレビ記 4 章から 6 章に記されている。「こうして、祭司が彼らのためにあがないをするならば、彼らはゆるされる」レビ記 4:20、31、35、5:10、13、16、18、6:7。

「贖罪に関する重要な真理が、この年ごとの務めによって民に教えられた。1 年間にわたってささげられた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全な贖いを果たしたのではなかった。それは、ただ、罪が聖所に移される手段を提供したにすぎない。罪人は血をささげることによって、律法の権威を認め、律法に違反した罪を告白し、世の罪を除くおかたへの信仰を表明した。だが、彼は律法の宣告から完全に解放されたのではなかった」(あ上 420)。

あがないは「贖罪の犠牲と全能の仲保者」によってなされるのである(大下 221)。そして、至聖所の仲保の働きであがないが完成されるのである。罪の処理が完成するのである(大下 217、397、国下 196)。

あがないの日になって、民はすべての罪から清められ、あがなわれたのであった。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」(レビ 16:30)。

「こうして、新しい契約が完全に成就する。」『わたしは彼らの不義を

ゆるし、もはやその罪を思わない。』『主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない』（エレミヤ 31：34、50：20）。『その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。そして……シオンに残るもの、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる』（イザヤ 4：2,3）」 大下 217。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは主の再臨を迎える準備ができるのである」（大下 141）。

最後の教会は、「月のように美しく、太陽のように輝き」「清くて傷のない栄光の姿の教会」「旗を掲げた軍勢のようにおそるべき=すばらしい、すてきな状態になって花婿なるイエス・キリストを迎えることになる。（雅歌 6：10、エペソ 5：27、マラキ 3：4、大下 140 参照）。アダムが罪を犯す前の罪なき状態（スタディバイブル新約 428）へと完全に罪から清められ、解放されて花婿に会うのである。

花嫁なる教会は、花婿キリストの品性を完全に再現して神のご品性を擁護することになっている。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性がキリストの民の中に再現されたときに彼らをご自分のところに迎えるために、主は来られるのである」（キ実 47）。

人間が変えられるのは、眺めることによるという精神の法則がある：

「イエスの比類無き魅力キリストを見よ、彼のご品性の魅力ある美しさを見よ。そうすれば見ることによって、あなたは彼に似たものへと変えられていくであろう」（スタディー・バイブル新 387）。

「『これを造る者と、これに信頼する者とはみな、これに等しい者になる』（詩篇 115：8）ながめることによって変化するのは、人間の精

神の法則である」(あ上 89)。

「キリストを見るということの意味は、み言葉のうちに彼の生涯を研究することである。我々は真理を隠された宝のように掘り下げるべきである。目をキリストに留めなければならない。彼を自分の個人的救い主とするとき、そのことが我々を恵みのみ座に大胆に行かせるのである。見ることによって我々は変えられ、品性において完全であられるお方に道徳的に同化するようになる。彼が与える義を受け入れることにより、聖霊の改変させる力を通して、我々は彼ようになる。キリストのみかたちを思い続けるとき、それは我々のすべてを魅了するのである (MS 148, 1897 年) 」(スタディーバイブル新約 388)。

教会にとって花婿であるイエスから目を離すことは、由々しいことである。危険である。エバはアダムから目をはなしたので、サタンの誘惑に負けて人類を売り渡す結果になった。

旧約聖書は、イエスの妻として選ばれたイスラエルが、夫から目を離して不倫、姦淫に赴く様子を描写している。花婿、あるいはイエスから目を離して周囲の国々に目を向けてしまい、偶像礼拝に陥ってどれほど神を悲しませ、怒らせたか。

現代イスラエルも古代イスラエルと同じ道を歩んでいると、預言者は警告している。次の言葉に留意していただきたい：

「我々の歴史とイスラエルの歴史との間には著しい類似点がある」(4T 17)。

「あなた方は、古代イスラエルと同じ道をたどっている。神の特別な民としての聖なる召しから同じように落ちている」(5T 75-76)。

教会は、花婿なるイエスから目を離して、世俗を眺め続けると、感化されて同化することは免れない。今日の教会の背教の原因はどこにあるだろうか？ 「栄光の姿の教会」でなく、ラオデキヤ教会になってしまった原因はどこにあるのだろうか？ イエスを見失ったことにある。イエスから目を離してしまったからである。

教会に来ているから、信者であるから、イエスを信じているのだから、イエスを見失っていることはないという異論を唱える人がいるだろう。教会

はイエスを高く掲げているのではないかと言うであろう。他教派も「イエス、イエス、十字架、十字架」を唱えていることに変わりはない。

イエスを眺めるということは、イエスがおられるところに目を向けなければならない。使徒パウロはこう述べている：

「その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである」（ヘブル 6：20）。

「さきがけ」ということは、後についてくる者がいるということである。我々がついていくのである。私たちのために十字架に掛かれたイエスは、復活し、昇天し、天の聖所に入られた。我々も天の聖所に入っていかなければならないということである。信仰と愛情によって入っていくのである。

「入っていく」「眺める」ということは、どういう意味であろうか。花婿キリストの大祭司としての働きと立場を理解することである。つまり、「天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって従う」ことである。（大下 144, 145 参照）。贖罪は十字架で終わったのではない。十字架で開始された働きを完成するために天の聖所に入られたのである（大下 222）。

「大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理から」「数え切れないほど多くの策略を考え出して」「人々の心をそらすことに」懸命になっている。なぜなら「万事がかかっている」真理だからである（大下 221）。特に最後の仲保の働きを憎んでいる。

聖所までの経験—すなわち、クリスチャンになってだんだん清めを経験するということは一般キリスト教会でも教える。これを聖潔、聖化という。しかし、至聖所の経験—すなわち罪の除去、特別なあがない、完全に罪から清められて花婿イエスの再臨を迎えるという教えは、セブンスデー・アドベンチスト教会以外、どこにも見当たらない。

至聖所の働き、「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」は、他のキリスト教会から最も非難されている教理である。ところが、わが教会内でも他教派から影響を受けて、この大真理、現代の真理が無効にされつつある。

# 5

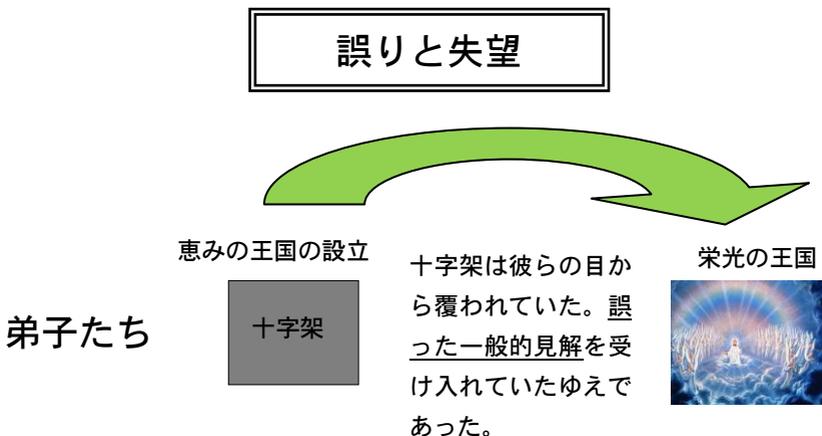
## なぜ、我々はイエスを見失ったのだろうか？

理由は三つあるように思われる。

1. 栄光の王国を期待し、恵みの王国の理解を失ったこと。
2. 世俗に目を向け、魅了されてしまったこと。
3. キリストの再臨の遅延。ちょうど、戦場から夫の帰りが遅くなったので、最後まで純愛を保てず忍耐を失って不倫に陥る妻のように、我々も世俗に傾いた。

### ●恵みの王国と栄光の王国の区別（大下 40）。

弟子たちは、預言の誤った一般的見解のゆえに、**栄光の王国**を期待して贖罪の犠牲、十字架を理解することができなくて大失望を経験した。ダニエル9：26の「62週の後メシアが断たれる」、つまり十字架にかかるということを見逃してしまっただけでなく、恵みの王国が設立されなければならないのに、彼らはキリストが王の王として来られるメシヤを期待していたのである。

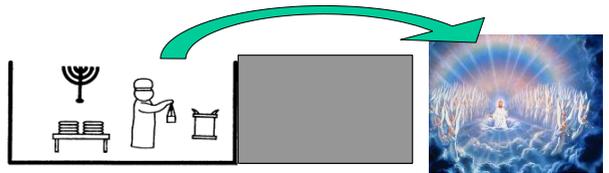


1840年代の再臨信徒も同じような経験をした。

ダニエル書 8：14 の 2300 日のタイムラインの研究から、1844年に再臨信徒は主イエスの再臨を期待していたが、大失望を経験した。彼らは、一般的な教会の誤りから「聖所」はこの地上と思い、イエスを見失ってしまった。大争闘下 138 頁にこう書いてある：

「その望みが失望に終わったとき、彼らはイエスを見失い、墓のそばのマリヤとともに、『だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです』と叫んだのであった」（大下 138）。

1800年代の  
再臨信徒

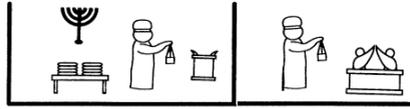


しかし、熱心な祈りと預言の研究によって、彼らは再び主を見出したのであった。どこに？ 至聖所の中に！ 栄光の王国、キリストの再臨に人々を備えさせるもう一つの準備の働き、すなわち、「最後の特別なあがない」、「特別な清め」をするために大祭司イエスを至聖所に見出したとき、当時の再臨信徒は、全世界に飛び立つエネルギーを与えられたのであった。初代文集 415 頁に次のように書かれている：

「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所にはいる時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである」。

「彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた」（初文 415）。

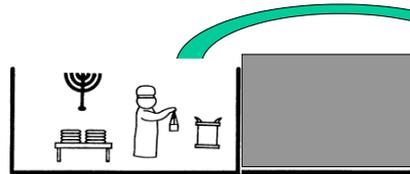
大失望後の  
再臨信徒



1844年から160年も経過した今日の教会はどうであろうか？

そもそも第三天使はどこに信徒を向けるのだろうか？ 至聖所である。今日、イエスは、さきがけとなってそこに入られたのだから、我々も至聖所に入るべきではないだろうか？ そこにイエスはおられるのである。しかるに、今日のセブンスデー・アドベンチストの教会で至聖所のこと、「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」が説かれ、聞かれるであろうか？ 前に引用した靈感の言葉によると、我々は再びイエスを見失った。至聖所に入っていない。

今日の  
SDAの  
危機



62週の後メシヤが出現することは当たっていたが、弟子たちの誤りは、ダニエル9：26の十字架を見落としてしまったことであった。1844年の再臨信徒は、ダニエル8：14の2300日の時の計算は当たっていたが、事件を誤ってしまった。聖所についての理解が誤っていたのだ。今日我々は、どこかで誤っていないだろうか？ 彼らは預言のタイムラインと事件の解釈が誤っていた。

今日の教会はどうであろうか？ ダニエル書12章のタイムラインを誤

って解釈していないだろうか？ それは過去のことで、すでに 1800 年代に成就したことだというのが今日、教会で聞かれる一般的誤りである。1260 日、1290 日、1335 日の預言は、教会が完全に清められたら、キリストの再臨まで約 3 年半という再臨信徒への慰めのメッセージである。我々は再臨に備える至聖所におけるイエスの「最後のあがない」「特別な清め」を見落としてしまっていないだろうか？

## ●セブンスデー・アドベンチストの誕生の原点に戻ってみよう。

主の僕は 大争闘下 140 に次のように言っている：

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった」（大下 140）。

※「まだ主に会う準備ができていなかった」と言われている人々は誰のことか？ 初代文集を見ると、彼らは知っている限りすべての罪を告白して主を迎える準備に一生懸命であった。「その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた」（初代 393）。

彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていく時に、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

※彼らは、至聖所のことを理解した時に悩みの時に備えて、仲保者がいなくて生きるためのもう一つの経験が必要であることがわかった。それは、どんなことであつたのか。キリストに罪がなかったように、彼らもそのようになっていなければならない（大下 397、初代 149）。

預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁あじのようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ 3：2,3）。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむ時地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがな

く、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

●黙示録 14 章には純潔な傷のない 144,000 のことが記されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。

『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』マラキ 3 : 4)。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5 : 27)。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6 : 10)」（大下 140-141)。

サタンは、この大真理に盲目になるようにセブンスデー・アドベンチストに働いている!!! なぜなら、「この大真理に万事がかかっているからである」(大下 221)。後の雨も、神の民の品性完成も、福音伝道も、神のご品性擁護も、花婿キリストを迎えることも…万事がかかっているのである。

この経験は、我々が今持つておらず、死なないで生きて主を迎えるには持たなければならない不可欠な「もう一つの経験」なのである。(大下 396、初文 149 参照)

では、死んで主を迎える聖徒たちは、この経験をしないとすれば、どのように天に移される手続きがなされるのであろうか。キリストの再臨を待ち望んで眠りについていく聖徒たちは、キリストを信じるからといってそのまま復活して天に移されるのであろうか？ 否、否、否である!!! 彼らも死んで後もう一つの特別な手続きが必要である。それが分かると、死なないで生きて主を迎える人の経験が良く分かる。

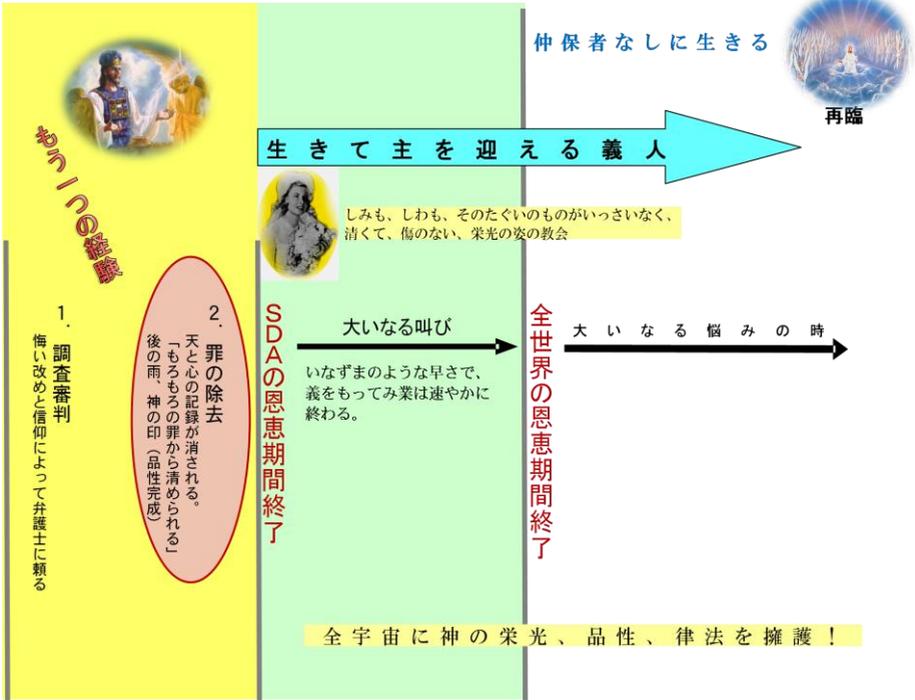
罪のゆるし、罪からの清め、罪の除去は、花婿キリストご自身のためになさなければならないことなのだ。

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」（イザヤ 43 : 25）。

御子キリストのためにつくられたのだから、花婿キリストのために我々は救われなければならないのだ！ キリストのために完全にならないといけないのだ！ キリストのために天国にいかなければならないのだ！

これほど重要な大真理を「見ざる、聞かざる、言わざる」で見過ぎていいだろうか。見て仰いで生きよう。聞いて悟ろう。行って伝えて希望を与えよう。この大真理を！

人間が罪を犯すと天の宮において、また神の宮である我々にどんなことが起こるのか。罪性とは何か。罪性はどのように処理されるのか。罪と、その記録はどのように処理されるのか。生きている聖徒たちは、生きている間に罪の除去を経験する。キリストにある死者は再臨の時に罪が除去されないとすれば、いつ天国に移される手続きがなされるのであろうか、詳しい考察は第二部にまわすことにする。



- アダムが罪を犯す前は、仲保者を必要としなかった。
- イエスに罪がなかったので、仲保者を必要としなかった。
- 生きて主を迎える 144,000 は、罪がないので仲保者を必要としない。

エゼキエル 36:22 わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる。

わたしがすることはあなたがたのためではない。それはあなたがたが行った諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためである。



## 第二部

人はいつ、どのように  
天国に行ける状態にされるのであろうか？  
罪はどのように処理されるのか？

### 6 · 三つの事実

1. 人は罪のまま天国に入れない。
2. 悔い改めたクリスチャンは、天国に移される状態ではない。  
どんなに清い生涯を送っていても。

十字架上の強盗の一人は悔い改めてイエスを信じた。救われるか？ 然りである！ イエスはパラダイスを保証なされた。そのままの状態ですべて天に移されるか？ 否である！ ゆるされてもまだ罪はある。罪の根＝罪性＝生来の罪、記録、傷は残っている。

あの聖徒パウロは、救われるか？ 然りである！ 彼は天国に移される状態であったか？ 否である！悔い改めて、ゆるされ、イエスを信じて清められた聖徒たちは、死んだらすぐ天国に行くといふ多くのクリスチャンは信じている。

セブンスデー・アドベンチストはそうは教えないが、キリストの再臨の時に罪は除かれ、天に移されると考えている人が多い。

### 3. 天国に移される前にもう一つの手続きが必要である。

ここがセブンスデー・アドベンチスト（第七日安息日再臨教団）と他のキリスト教会との根本的相違である。すなわち、最後の贖罪＝罪の除去という経験、手続きである。それは、再臨前の「神の裁きの時」＝調査審判の時になされる。①死ぬ人は、「死んで後、さばき」（ヘブル 9：27）を受け、②キリストの再臨まで生きる人は、生きている間にこの経験をするのである。

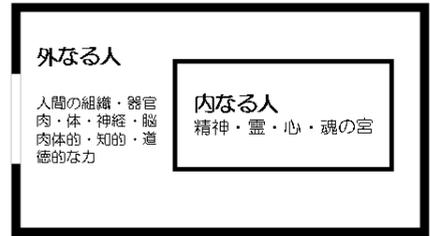
7

では、人は罪を犯すとどうなるか、罪をゆるされるとどうなるか？ いつ、どのように罪は我々から取り除かれるのであろうか？

そのことを理解するためには、人の性質を理解する必要がある。読者は、これをむずかしい神学だと思わないで頂きたい。聖所は深遠な贖罪の真理が誰でも理解できるように視覚化されたものである。

人は「神の生ける宮」として造られた。聖所は人間に対する実物教訓でもある。

2 コリント 4: 16 にパウロは、次のように言っている： 「外なる人」「内なる人」、つまり、人は肉体と精神から成っている。「外なる人」は、肉体、組織、器官、神経、肉体的、知的、道徳的能力によって構成されている。能力はタレントであって、品性を構成するのではない。「内なる人」、すなわち品性を構成するものは、「思いと感情」である。



## 8

・人が罪を犯すとどんなことが起こったであろうか？ アダムが最初に罪を犯した時、何が起こったのだろうか？

靈感の言葉を見てみよう：

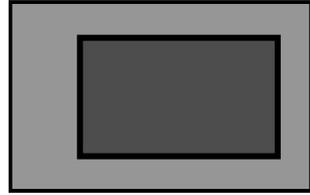
「罪のない夫婦が、悪を知ることは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪は、さしひかえておられた。それなのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べてしまった。こうして彼らは、それを一生の間食べ続け、悪の知識をもつことになるのであった」（あ上 48）。

「かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている」（教育 17）。

「善悪を知る木の実を食べた結果、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には悪への傾向、すなわち、自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている」（同 21）。

まとめると、こうなる：

悪の知識＝罪への傾向＝サタンの品性



「彼らの得た大いなる知恵というのは、罪の知識と罪悪感 (Sense of guilt) だった」(生残 51)。

罪の知識＝罪への傾向＝サタンの品性は、すべての人に、罪が除去されるまで一生の間残るものである。

しかし、罪悪感は、告白するときに天の聖所に移されて、瞬間的に良心は罪責（とがめ）から清められ、解放される。何とありがたい神のご配慮であろう。なぜなら、罪悪感は長く心に留めておけばおくほど、我々の心身を蝕むからである。罪を示されたら、すぐ、「わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づ」くように勧められている（ヘブル 4：16）。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（第一ヨハネ 1：9）。「すべての罪」というのは、認識された罪のことであって、生来の罪は悔い改めてゆるされた人にもまだ残っている。これを「罪性」、宗教改革者は「原罪」と呼んだ。それは、サタンの品性「利己主義」（キ道 13）であり、「自我」である。

預言者は、「一生の間残る」、「生来の罪 (imbred sin) との戦いがある」（RH 1887/11/29）と言っている。ルターも同じことを言い、ウエスレーは「聖所の清めの時まで残る」と言っている。しかし、聖霊に支配される聖徒は、それに支配されずに、勝利の生活を送ることができる。これが聖化の経験である。聖徒たちは、みな聖化を経験してきた。

## 9

## ・ 聖化の経験で罪性＝原罪＝生来の罪はなくなる

人は一生の間、それと戦うように残されている。聖化の過程は、もっともっと自身の罪深さとキリストの必要を我々に見せることである（聖化は、だんだん罪深さが感じられなくなることはない）。キリストに近づけば近づくほどますます欠点が多く見えてくるようになる（キ道 86、大下 200、202、327、希中 327、希上 104、3SM427、国下 193－196、大下 216、2T 505 参照）。



一生の聖化の過程において、その目的は、品性の発達であって、罪性を除去することではない。もし、罪性が除去されるなら、品性発達の手段が失われることになる。人間の墮落以後、戦いを通して品性は発達するようになったのである。「地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」（創世記 3：17）。「生来の内からの罪との戦いがあり、外からの罪との戦いがある」（RH 1887/11/29）。神にはそれを一度に取り除く力がないわけではない。我々のためにそれは残されているのである。

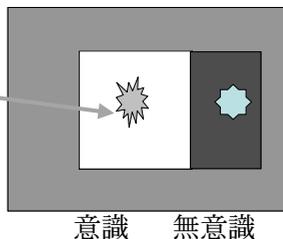
「人は生きた頭であるキリストに向かって成長する。それは一瞬の働きでなく、一生の働きである。たとえ神の生命に日ごとに成長していたとしても、その人の恩恵期間が閉じるまでは、キリストにあって完全なみ像に到達することはない」（4T 367）。

もし、その人の恩恵期間が終わるまで、キリストにある完全に到達できないとすれば、罪性はいつ取り除かれるのであろうか。再臨の時であらうか？

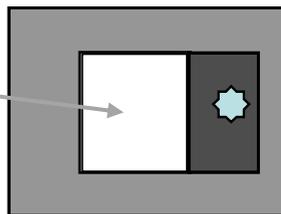
**罪の記録**：人が罪を犯した時に天の聖所と心の聖所に記録され、それが除去される時まで残る。

人が犯した罪を知るようになって**罪責（罪悪感）**を得る。

しかし、告白すると、それは、**天に移される**。  
キリストが負ってくださる。



「**心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか**」（ヘブル 10：22）。



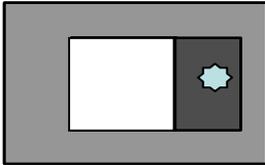
これが義認の経験である。罪がない状態ではない。しかし、「義人」と呼ばれる。聖化の経験である。

このような状態では、義人と見なされても天に移されることはできない。生きて主を迎える聖徒は、「今、我々が持っていない、もう一つの経験が必要である」（大下 396）。

死んだ義人もこのような状態で天国に移されることはできない。「もう一つの手続き」が必要である。それは、「調査審判」と「最後のあがない」である。すなわち「罪の除去」の働きである。それは、調査審判の時まで待たなければならない。今は**罪性も、罪の記録もまだ残った状態**である。これは神の律法の宣告から完全に解放された状態ではない。

律法

No!

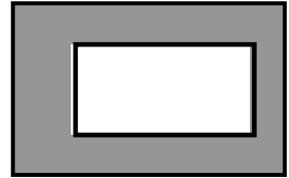


永遠に義である神の律法は、完全以外のものを容認しない。左の図は律法の要求を満たし得ない。律法の要求を満たす右のような品性は、いつ、どのように完成されるのだろうか？

死んだ義人は死んで後さばきを受ける。彼らの罪はその時除去される。であるなら、死なないで、生きている義人は、生きている間にさばきを受ける。その時罪が除去されるのである。単純な推論ではないだろうか。

律法

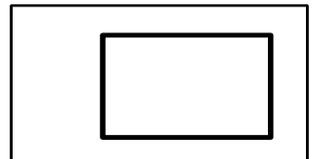
Yes!



神は、最後の仲保によって「もろもろの罪を清められ」るのである。「もろもろ」というと「すべて」の罪である。①罪責。②罪の記録。③罪の知識＝罪への傾向＝サタンの精神＝原罪＝利己主義＝罪性、すべてが除去される。その時、我々は、アダムが罪をおかす前の「罪なき状態」にされ、こうして「主の再臨を迎える準備ができるのである」（大下 140）。

律法

Yes!



アダムが罪をおかす前はどんな状態であっただろうか。外なる人も内なる人も完璧であった。肉体的、知的、道徳的能力も墮落しない完璧な状態であった。「<sup>おそる</sup>畏べく、すばらしく(驚嘆すべく)造られてい」た(詩篇 139 : 14 欽定訳)。

創造主の宿る宮として造られた人間は、神の栄光、品性を表していた。幕屋と同じように、人間の栄光は、内に秘めた飾りにあった。聖霊は人間に命の息を吹き入れた。彼の心は、神の御心に似ていた。心の奥の部屋において、神はご自身の愛の律法を「心の板」にお書きになった。「神は愛である」。すなわち、神のご性質及びその律法は愛である。聖霊を通して、人間は神の罪なき性質を持つ者であった。

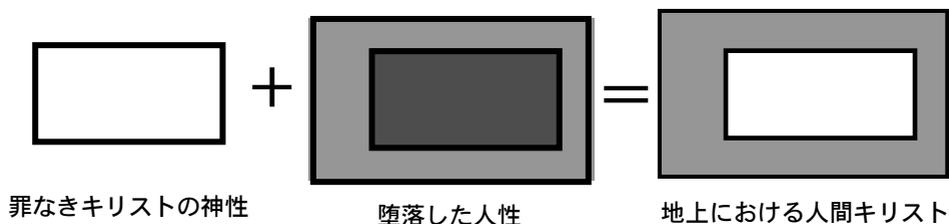
アダムが罪を犯した後、すべての人間は、**右の図**のように、外なる人も、内なる人も墮落してしまった。



しかし、第二のアダム、キリストは我々をあがなうために、アダムが墮落する前の状態でこの地上にこられたのではなかった。墮落して後の人間の状態を取られたのであった。「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。

わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」(ヨハネ 1 : 14)。キリストは、幕屋が象徴しているところの栄光ある御目的を達成するために来られた。外観は、「われわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさも」なかった(イザヤ 53 : 2)。我々と同じ肉と血にあずかりながら、4千年の遺伝の法則を受けた、肉体的、知的、道徳的能力も弱くなった性質を取られたが、その内なる人、そのご品性は罪のない状態であった。聖霊によって生まれ、聖霊によって生きたからであった。天父に対する信仰、依存によって罪のない生涯を送られた。

イエスの生涯、品性は完全に律法の要求を満たし得た。



キリストがこの地上に来られ、墮落した人性を取られたのは、ただ、罪人のために身代わりとなって死んでくださるためだけではなかった。人間は神の律法を守ることができる、罪のない生涯を送ることができるということを実証することによって、サタンの主張は間違っていることを全宇宙に示すためでもあった。

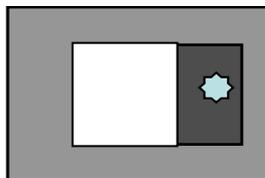
「しかし、贖罪の計画は、人類の救済より、もっと広く深い目的をもっていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなかった。この小さな世界の住民が、神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなかった。それは、宇宙の前で、神の性質を擁護するためであった」(あ上 61)。

聖書は、キリストのように、罪のない品性をもって神のご品性、律法を擁護する民をこの地上にお持ちになると書いている。これによってのみ、キリストとサタンの大争闘に終止符を打つことができるのである。人間はそのために創造された。そのためにキリストの尊い血が流されたのだ。そのためにキリストは全能の仲保者として働いておられるのだ。

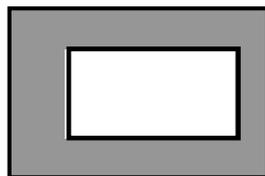
では、いつ、どのようにそれが実現されるのであろうか？ 聖所にその道があり、その方法が示されている(詩篇 77:13—欽定訳)。日毎の奉仕と、年毎の奉仕にそれを見ることができる。

我々は、日毎の赦しと清めにあずかって、神の性質にあずかる経験をする。キリストの純潔を仰げば仰ぐほど、自分の欠点、罪が示される。忠実に、キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、悪との戦いの勝利者となった者たちに最後の仕上げとしてすばらしいことがなされるのである(大下 141)。「聖潔」の完成である(大下 216,217)。昇天に備えるのである。

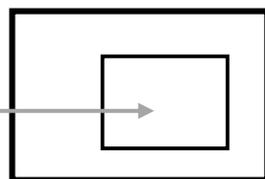
我々が日毎の経験でどんなに清められた域に達したとしても、天に移されることはできない。もう一つの働き、すなわち、最後のあがないが成し遂げられなければならない。右の図のように不完全のまま天に移されることはできない。一般キリスト教会は聖潔、聖化の経験で天国に移されると説く。セブンスデー・アドベンチストはどこが違うのであろうか？ 天に移される前に罪の除去がなされなければならないということである。



いつ、神の民から罪が完全に除かれるのであろうか？ キリストの再臨の前になされなければならない。 ダニエル 8：14 はそれを教えている。卑しい肉体が不死の体に変えられるのは、再臨の時である。

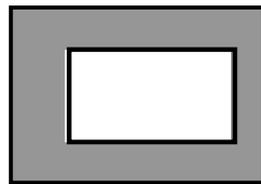


**死んだ義人**たちは、右の図のような状態で再臨の時に復活する。生きている義人たちは、再臨の時には外なる人、すなわち肉体が一瞬にして**変えられる**のである。ちょうど主イエスが復活された時のように。



「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」第一ヨハネ 3:2。

**144,000** は再臨の時まで右の図のようである。墮落した肉体、外なる人を着たままである。この地上でのキリストの品性も右の図のようであった。キリストの地上での完全な品性は、神が我々に対して持っておられる理想であり、それは神の約束である。キリストの再臨の時に、我々の品性や、性質が変えられるのではない。



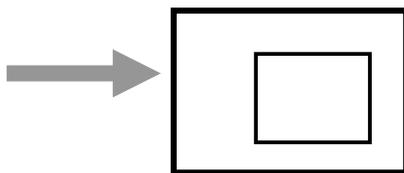
印された 144,000

「キリストが来られる時、我々の品性は変えられない」(RH 1888年 8月 7日)。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キ実 47)。

罪がなくなり、キリストの品性のようにされるのはいつか？ 調査審判の時である。再臨の時ではない。

生きて主を迎える 144,000 も再臨の時には右の図のようになるのである。卑しい朽ちる体、外なる人が一瞬にして朽ちない体に変えられるのである。それを栄化という。



死んで主を迎える聖徒たちの審判は 1844 年から始まった。彼らは罪性と罪の記録を持ったまま、眠りについた。彼らは 144,000、初穂の出現を待っている。

まもなく日曜休業令が立つ。生ける義人の裁きが始まる。靈感の書によると、さばきは聖徒のためになされる永遠の福音である。永遠の罪の除去、永遠の義をもたらす。さばきは神のために神ご自身を擁護する福音でもある。「あなたがたによって、わが聖なることを諸国民に示す時」

(エゼキエル 36 : 23) である。

「神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう」(ローマ 11 : 22)。

## まとめ：

1. 死んで主を迎えることと、生きて主を迎えることには体験において決定的な違いがある。
2. 死んで主を迎える聖徒は、死んで後さばかれ、罪が除去されて、天に移される準備がなされるが、生きて主を迎える聖徒は、生きていううちにさばかれて罪が除去され、最後の贖いという経験によって罪なき完全な品性とされる。新しい契約が神の民のうちに永遠に成就される。神の愛の律法が、心に永遠にするされる。
3. 全天は 144,000 の出現を待っている。彼らは、キリストとサタンの大争闘の終結の鍵を握っている。彼らによって、神のご品性、律法が全宇宙に完全に擁護されるのである。
4. セブンスデー・アドベンチストの存在した本来の目的は、人々に生きて主を迎える準備をさせることにある。
5. セブンスデー・アドベンチストの恩恵期間は一般の恩恵期間よりも先に終了する。

日曜休業令が出ると神の民と称する者、生ける義人のさばきに移る。これは我々の永遠の運命を決定する事件である。昔のイスラエル人があがないの日に聖所の周りに深い悔い改めをもって集まってきたように、今わずかに残されている恵みの日に心を深く探り、悔い改めをする時である(大下 224)。調査審判(悔い改めと信仰をもって臨む者には永遠の福音である)が終了してからは、もう時遅しと宣言され、悔やんでも悔やみきれない「胸を打ちたたいて」嘆く時が来ることが靈感の書に警告されている。「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終わった、しかしわれわれはまだ救わ

れない」(エレミヤ8:20)。

新垣三郎先生の例から学ぶ：

サイパン戦において彼は米軍に協力した二人を殺し、殺人犯として逮捕された。19才の青年であった。T 憲兵伍長に命令されてやった行為であった。しかし、彼は T 伍長からこう言われていた：「新垣君、お互いがやったことを白状するんだ、そうすれば僕も君も間違いなく死刑になる。殺人を犯したのはあくまで君であっておれではない。だから俺が命令したとは言わないで独断的に自分一人でやったと自白してくれ。私は山の敗残兵たちと連絡をとったり、米軍からのいろいろな情報を知らせたりした事を自白することによってきみ以上にスパイ行為という重罪で必ず死刑になる」と。

厳しい取り調べがなされた。かれは T 伍長から言われたとおりにどんな厳しい追及があっても自分一人の独断的犯行であることを述べた。取り調べにあたった検事側は、この兵隊でもない若僧が誰にも命令されず日本兵二人を殺すはずがないと思い、何度も真実を告白せよと迫った。しかし、その証拠が上がらなかったのどうとう軍事裁判において三郎は死刑と確定された。それから彼の死の恐怖との戦いが始まった。しかし、驚いたことに T 伍長は無罪となって、そのキャンプ場から引き上げていたことを知らされた。運命を共にしようと思った T 伍長に裏切られた。それを知った三郎の T 伍長に対する憎しみに燃える毎日が続いた。彼を呪った。いつか必ず T 伍長を殺してやると復讐心に煮えたぎった。

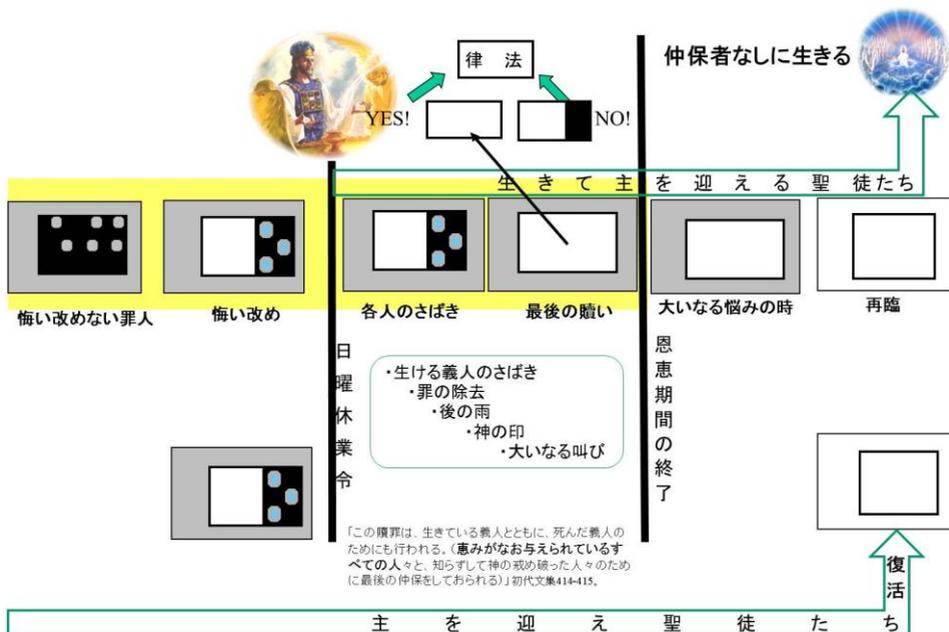
しかし、軍事裁判が終わってからは、もう時はすでに遅しであった。真実を告白し、犯行はあの憲兵伍長の命令によるものだと何度も訴えたが、あとのまつりであった。もう受け付けてはもらえなかった。それから、気も狂わんばかりの死刑囚としての長い苦悩の生活が続いたのであった。

## 教訓：

生ける者の調査審判が開かれている間は、我々にとって最後の恩恵期

間である。神も天使たちも長い間、我々の真実な悔い改めと告白を待ってきた。サタンは悔い改めないように懸命に働く。なぜか？ 我々が罪を悔い改めなければ、サタンは、自分がその刑罰を負わなくて済むのである。サタンの刑罰がそれだけ軽減する。我々が悔い改めて告白すると、その罪はキリストが負われ、やがてキリストはサタンに負わせるのである。だから、サタンは我々が告白しないよう必死に働きかけるのである。

「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた』」（第二コリント 6：2）。



書籍案内

# キリストとサタンの大争闘

E.G.ホワイト著

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！



ポケット版（革表紙チャック付）

400 円



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471  
TEL (0980) 56-2783 FAX (0980) 56-2881

E-mail : [contact@srministry.com](mailto:contact@srministry.com)

ホームページ : [www.srministry.com](http://www.srministry.com)